

移情閣コンサートシリーズ

鳴尾牧子

9月2日（土）、由緒ある孫文記念館、移情閣ホールでのコンサートシリーズのオープニングに、著名古箏奏者のウー・ファンさんがご出演下さいました。重厚で趣深いホールがウー・ファンさんのご登場で華やかさを増し、マイクを使わない贅沢な古箏の音色がホールに響き渡りました。中国の美しい風景が目の前に立ち現れるようなウー・ファンさんのオリジナル曲から始まり、日本でも烏龍茶CMで流れて親しまれている中国の民謡（なんとウー・ファンさんの歌声入り！）、夏から秋へと移り変わる今季節にちなんだ日本の名曲など次々に演奏して下さいました。震災で亡くなれたお姉様と、お姉様が愛した神戸を思って作曲された「彩虹橋」では想い深さに引き込まれ、古箏の伝統曲「戦台風」では圧倒的な演奏技法と迫力のある力強い音色に圧倒されて、客席からは思わず感嘆の声が上がりました。余韻冷めやらぬお客様からの拍手に応えてのアンコールは、撮影も可ということで、和やかな雰囲気の中で終演を迎えました。ウー・ファンさんからは、友の会・記念館の皆様の温かい対応、スタッフの心尽くしの歓待に対する感謝のお言葉を頂きました。明石海峡に臨む舞子の開放的で明るい風景、そこに佇む歴史ある大正建築の中で、豊かな音楽文化を味わうことのできる場として、関係者の皆様のご協力のもと、今後もこの移情閣コンサートを大事に育てて行きたいと思います。

続きまして、第二回 10月21日は琵琶演奏家の葉衛陽さんをお迎えして開催しました。中国の伝統衣装「長衫」をアレンジした衣装で颯爽と移情閣ホールに登場した葉さん。伝統曲「龍船」のさまざまな技法で会場を惹きつけました。同じ「琵琶」という名前を持ち、共通の祖先を持ちながら、異なる発展をして来た中国と日本の琵琶の違い、現代の中国琵琶の奏法について、分かりやすい説明を頂きながらの演奏でした。歴史の長い琵琶ならではの古典曲の中から、美しく優美な文曲「春江花月夜」、激しく勇壮な武曲「十面埋伏」を聞かせて頂き、聴き比べることでその対比がよく伝わるとともに、悠久の歴史にも思いを馳せることができました。琵琶には、短い時間の中では言い尽くせない、長い歴史の中で育まれたたくさんの技法があり、今回の演奏の中にも「これはいったいどうやって出すの？」という音や奏法がたくさん含まれていたと思います。また機会があれば、琵琶の魅力をさらに深く掘り下げるコンサートを企画したいと思います。

11月12日（日）に開催の第三回は音楽ではなく、雲南に暮らす中国少数民族ダイ族の舞踊。日本人として唯一ダイ族舞踊の伝承者として認められている遠藤智子さんの舞を、間近で拝見することができました。写真や動画撮影もOKとのことで、お客様も時折カメラを構えながらの公演でした。後で写真や動画を送つてもらいましたが、本当にどの瞬間を切り取っても美

しくて驚きます。レクチャーコンサートという試みだったので、ダンスの合間に解説もお願いしました。ダンサーさんは演奏家と違って、一曲終わった直後は少々息が上がっているものだということを失念していた失礼な構成だったにもかかわらず、とても気さくにさまざまなお話を下さいました。初めて知る内容が多くて大変興味深く、最後の質疑応答では会場から質問に応えて脱力の方法をピチレクチャーをして下さり、みんなで体を動かして肩をスッキリさせて終演しました。また、移情閣友の会を代表して、フルス同好会講師の濱崎繁一先生と二胡同好会の鳴尾でダイ族の民謡を演奏し、遠藤さんとコラボレーションさせて頂きました。フルスはまさに雲南を代表する楽器で、遠藤さんが衣装替えをするタイミングで、濱崎先生にフルスの解説も頂きました。



古箏演奏 ウー・ファンさん



琵琶演奏 葉衛陽さん



孔雀舞 遠藤智子さん



胡琴演奏 KIKKA Ensemble

師走の休日、胡琴重奏のわくわくするような演奏を聴きました。聴きなじみのある曲から始まり、独奏、二重奏、と音の重なりが増えていきました。音色の違う二胡・高胡・中胡にギター、パークッシュンが加わり変化に富んだ演奏でした。フラメンコ調の曲はノリがよく、ラストの「新賽馬」は迫力満点でした。中国の伝統曲からアップテンポな曲、巷で話題のあの曲まで、KIKKA Ensembleにかかるべ全で素敵なハーモニー♪ アンコールはクリスマスソング☆十二名の重厚な音の重なりが歴史を刻んできた孫文記念館の講堂に響き、ひとりひとりのこころの中にしみわたったことでしょう。

新たな年も『移情閣コンサート』に幸あれ!!
二胡同好会・コンサートスタッフ 中北富代

陳舜臣生誕100周年記念行事 シリーズ談話「陳舜臣一人と作品」に参加して

前田寿美恵

この度は作家陳舜臣さん生誕100周年記念行事への参加と移情閣友の会入会のご縁をいただき、大変嬉しく思っております。既に開催された2回のシリーズ談話についてご報告いたします。

第一回、11月11日（土）では陳舜臣さん自身の年譜とその膨大な作品の数々の特徴を橋雄三先生からご解説いただきました。当日は幅広い年齢層の方々にお集まりいただき、参加者の方々には各自おすすめの作品とともに陳舜臣さんとの思い出など大変貴重なエピソードをご紹介いただきました。台湾系日本人として神戸に生まれ神戸に暮らした陳舜臣さんが、たくさんの中国にまつわる作品を書くこととなった作家としてのその原動力についても議論が交わされ、「異郷に暮らしているからこそ、より一層自身のルーツへの憧れが強く感じられるのだ」という体験談を語ってくださる方もいらっしゃいました。小説十八史略が一番のお気に入り作品だという小学校4年生のお嬢様のご参加もあり、陳舜臣作品の持つ超世代的魅力の凄さにあらためて驚きと嬉しさを感じました。

第二回 12月9日（土）では神戸にまつわる作品に焦点がしづられ、作品の中に描かれた神戸の街並みについてご紹介いただきました。陳舜臣さんの作品にはご実家の貿易商社があった乙仲通りやお住いのあった北野町・山本通周辺が多く取り上げられているので、熟知の生活圏を舞台にした小説には、当時の町の賑わいや独特の雰囲気が人間味の溢れる豊かな表現で詳細に活き活きと描き出されていました。また『神戸というまち』（1965）

からつづく題名に「神戸」のつく3つの作品に書き加えられた内容の比較からは「ポートアイランド」「阪神淡路大震災」が加筆されるという時代の変遷と晩年陳舜臣さんが奥様と二人三脚での創作活動を行っていたことがうかがえる興味深い考察もご解説いただきました。陳舜臣さんの神戸を描写した作品と橋先生がお集めになられた当時の写真や地図をもとにした議論は、その場の全員で過去の神戸へタイムスリップするかのような楽しい時間でした。京都からご参加いただいた方からは「地図や写真では残せない都市空間の記憶が多くの作品に記されているということは神戸にとってとても貴重な財産だと思います」という素敵なお言葉をいただき、それをこうして大勢で語り合えることの喜びをより一層強く感じました。

全3回のシリーズ談話・最終回は来年1月13日（土）孫文記念館ホールにて開催されます。当日さらに多くの皆様とこの喜びを共有できることを楽しみにしています。



第1回シリーズ談話の様子



第2回シリーズ談話の様子

移情閣コーラスが共に祝う

NPO 法人国際音楽協会 理事長 張 文乃

中国の民族楽器の伴奏で大合唱。さらに生誕100周年を迎える陳舜臣先生作詞の「鶴橋」も力強い中国語の朗読と日本語での合唱が会場一杯に響き渡りました。多くの皆様と、新たな思い出を紡ぐことが出来た素晴らしい演奏会でした。



記念演奏会の様子